

# PAM通信 コラム

P

2010年9月発行

## <第42回> 能力評価

下記は、飲み会の帰り道での、介助者（A）さんと、私（T）の会話です。

（A）〇〇さんは手抜きはするけれど介助の能力は高いでしょ？

（T）う～ん、能力を評価することになると、ちょっときつい言い方をすれば、この業界（在宅障害者の介助業界）の介助者の50%は、一般企業では落ちこぼれるか、使えない人になってしまうかもしれないから…。

（A）それは間違っています…。50%ではなく75%です！

（T）え～っ！！

こんな会話を他にも聞いたことはありませんか？この業界には能力評価をされると、ちょっと辛い人たちが他の業界より多いかもしれません？でも、そのような人たちの居場所があることが、この業界の良い面だとも思うのですが…。

では、介助の能力とは何でしょうか？もちろん、着替えや移乗などの介助技術は能力の1つの要素と言えるでしょう。さらに、家事が手際良くできることも能力の1つの要素だと思います。しかし、技術や手際の良さとは違った能力の要素があると思います。それは、利用者のニーズに合わせて介助ができるという要素です。これは「常に利用者のニーズにアンテナを張ってられる」、「自己判断と、利用者の指示を仰ぐバランスが上手く取れる」と言い換えることができるかもしれませんが（利用者の能力の場合、的確に指示ができる要素、介助者の介助技術力や疲労度合いなどを把握できる要素などとなるでしょうか？）。PAMの介助者の能力のような、在宅障害者の介助の能力が問われるときは、特に後述の要素を重視すべきではないかと思います。日常生活の介助では、高い介助技術での介助だとしても、ルーティンワークのように介助をすることより、日々変わる状況や利用者の体調などに合わせた介助ができることが重要だからです。日常生活の“日常”は現実には存在せず、唯一無二の非日常が積み重なった日々が日常だからです。さらに、ルーティンワークにはルーティンからはみ出した状況への対処が疎かになる（例：冬の寒い日、溶け残った洗濯石鹸の粉が付着したままの洗濯物を干してしまう）という落とし穴もあります。

介助者の皆さんには、介助のプロフェッショナルとして、高い介助技術の習得を目指して欲しいと思いますが、それには多くの努力と時間と素質まで必要になると思います。ですが、「常に利用者のニーズにアンテナを張る」ことは“努力”すればできることだと思います。そして、能力のある介助者となって欲しいと思います。

身内の集まりから始まったような、在宅障害者の介助派遣業界も介助の能力や質などを問う必要がある時期が来ているのかもしれない。

前回のコラムでは、仕事と仕事とは言えない介助の境について考えました。今回は介助の評価について考えました。どちらも曖昧にしておいたほうが楽で、はっきりさせると辛い問題ではありますが、この業界の成熟には必要な思考過程だと思います。あなたは、ど



う考え、そしてどう行動しますか？（Ｔ）

ハ°-ソナルアシスタント町田 194-0013 町田市原町田 2-7-19-106 Mail : [pam@w7.dion.ne.jp](mailto:pam@w7.dion.ne.jp) 緊急時 : 090-1406-9367

